ヒマラヤ学誌　No. 21, xx–xx, 2025

ブータン東部のアマ・ジョモ儀礼についてのフィールドノート
――タシガン県カンパラ郡の事例――

石内 良季（京都大学）

1．調査地について

本稿ではブータン東部で行われる女神アマ・ジョモ（Ama Jomo）の儀礼であるアマ・ジョモ・ラセ（Ama Jomo Lhasoel）の諸相を紹介する。調査地はタシガン県（Trashigang Dzongkhag）の南部に位置するカンパラ郡（Kangpara Gewog）のゾルドゥン（Zordung）とテルプ（Thelphu）である。カンパラへは、カリン郡（Khaling Gewog）からワムロン（Wamrong）へ向かう国道3号線（PNH3）沿いから、ティムシン郡（Thrimshing Gewog）へと分かれる舗装された県道に入り、そこから車でおよそ1時間かかる。

カンパラに住む人々はツァンラ（Tshangla）と自称する集団であり、言語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属すツァンラ語のタシガン下部方言（The Lower Trashigang Dialect）を話す［Bodt 2012: 245］。西部ブータンを中心とするゾンカ語母語話者は、カンパラを含む東部ブータンの人々をシャルチョップ（Sharchop、東の人々）と呼び、東部ブータンの人々もこれを自称として用いる場合がある。

カンパラの標高は1,300mから2,600mである。地形は険しく、山々が取り囲むように、峡谷の中に集落が点在し、一部の家屋はまとまった集村を形成している（写真1）。カンパラの位置する谷の麓には、メラ（Merak）から流れてくるメラ・アマ（Merak Ama）と呼ばれる川がある。植生は広葉樹林が多い。村人の主な生業は農業であり、唐辛子（solo）やとうもろこし（asham）、じゃがいも（joktang）、大麦（pemung）、水稲（bala）などを栽培している。特にカンパラ産の唐辛子は全国的に有名であり、主要な現金収入源になっている。山の斜面には、乾燥させている真っ赤な唐辛子が一面に広げられている光景も見られ、赤と緑のコントラストがカンパラの景観を成している。家畜としては牛を飼っており、筆者が訪れた際は、収穫後のとうも

写真1　カンパラの谷

ろこし畑に放たれていた。農作物に次ぎ、カンパラの現金収入源になっているのは、手工芸品のバンチュン（bangchung）と呼ばれる竹籠である。その原材料であるリンシュ（ringshu）も一部地域で採取することができるが、近年は不足傾向にあり、王立自然保護協会（Royal Society for Protection of Nature）によって植栽が進められている。

カンパラとは文字通り「足跡（kangpar）」を意味している。言い伝えによれば、カンパラに生まれた18世紀の高僧ドゥプトップ・ドンガ・リンチェン（Drupthob Donga Rinchen）がブッダガヤを訪れた際に、釈迦の足跡の刻印を持ち帰り、それをモデルにして岩に足跡を彫ったとされる。この岩は現在もカンパル集落（Kangpar village）にあるドゥプトップ・ドンガ・リンチェンの居所（densa）に見られる（写真2）。

カンパラには、ラカン（lhakhang、寺院）で行われるツェチュ（tshechu）や、コミュニティ規模で行われるサニャン（sanyan）やラチェン（lachen）、各世帯で行われるガザン（gazang）やグンラ（gunglha）、カンシ（kangsi）

写真2　カンパラの由来となっている釈迦の足跡

といった様々な儀礼が存在する。本稿ではこれらの儀礼のなかで最もアマ・ジョモとの関係が深い、ゾルドゥンとテルプで行われるアマ・ジョモ・ラセの諸相を紹介する。ゾルドゥンは人口311人、テルプは人口101人である（2023年時点）。カンパラのアマ・ジョモ・ラセには、ブータン王立大学シェラブツェ校（Sherubtse College）の調査グループによる報告［Sonam Wangdi et al. 2020］がすでにあるが、内容は乏しい。そこで今回は、いくつかの訂正を施し、新たな知見と写真資料を加えた。

2. カンパラのアマ・ジョモ信仰

アマ・ジョモ・ラセは、女神アマ・ジョモを祀り崇拝することで、健康、繁栄、豊作、雨乞いなどさまざまな祈りがなされる儀礼である。アマ・ジョモとは、ブロクパ（Brokpa）と呼ばれる人々を、圧制下にあった当時のチベットから、ブータン東部のメラやサクテン（Sakteng）に導いてきた女神であるという伝承があり、メラの南方に聳えるジョモ・クンカル山（Jomo Kunkhar、標高4,319m）にポダン（phodrang、宮殿）を構えているとされる。カンパラの人々は、ジョモ・クンカル山あるいはそこにあるとされるワンセン（Wangseng）と呼ばれる場所を尊敬の意をこめてセル・ガ・ポダン（Ser ga Phodrang、黄金の宮殿）とも呼ぶ。

アマ・ジョモは東部ブータンで広く信仰されており、タシガン県内だけでもメラとサクテンをはじめ、カンパラ、カリン、ポンメ（Phongmey）、ラディ（Radi）、ションプ（Shongphu）、バルツァム（Bartsham）といっ

た地域でもその形跡が確認される。また、カンパラではアマ・ジョモのことをアマ・レクチョンマ（Ama Rekchongma）やジョモ・レマティ（Jomo Remati）とも呼ぶ。

カンパラからメラへは歩いて一夜かかる。シンカル・ラウリ（Shinkhar Lauri）へと向かう道との分岐点であるニェンサン（Nyensang）と呼ばれる場所で1泊し、ワンセンとジョモ・クンカルを超えて、メラへと辿り着く経路である。ゾルドゥンからメラの方を向いた際に正面に聳える山の裏側には、ブロクパの放牧地（tsadro）があり、ブータン暦9月から4月の間、特に冬が近づくと、この放牧地に降りてくる。ゾルドゥンやテルプの住民のなかには、低地に降りてくるブロクパと生産物の交換を通したネポー（nepo）と呼ばれる相互扶助関係を形成・維持している世帯がいくつかあり、カンパラの人々は、ブロクパが持ってくるチーズ（chur）やバター（si）を、とうもろこしや唐辛子、米と交換している[1)]。このように、カンパラの住民は古くからアマ・ジョモ信仰を強く持つメラのブロクパとの交流がある。

ゾルドゥンとテルプで行われるアマ・ジョモ・ラセでは、アマ・ジョモを主神とするが、集落の対岸あるいは背後に聳える山の神であるアウム・レチャン・セルム（Aum Lechang Sermu）やムリン・ピンスム（Muling Phinsum）、メメ・ポブラ（Meme Phobla）、メメ・ダンリン（Meme Dangling）もまた祈りの対象となっており、アマ・ジョモ・ラセにおいて重要な役割を担う。

ベディンプ（Bedingphu）にあるラマイ・ゴンパ（Lamai Goenpa）もアマ・ジョモとの関係が深い。言い伝えによれば、トンサ（Trongsa）のタンシビ（Tangsibi）出身のラマ・モンラム・ロプザン（Lama Monlam Rabzang、1878–1945）が居所を探しにカンパラへやってきた際に、1匹の黒猫がラマの前に現れ、現在のラマイ・ゴンパが位置する場所にある岩の上に飛び乗り、馬のように体を震わし、それを吉兆（tendrel）とみたラマはここに居座ったとされる。この黒猫はアマ・ジョモがラマに送ったとされており、岩の中にテン（ten、秘宝）として隠れ、現在もラマイ・ゴンパの下部に見られる。

カンパラにおけるアマ・ジョモ信仰の始まりは、コチェ（khoche）と呼ばれる父系氏族集団の時代に遡る。言い伝えによれば、カンパラには元々、バイナン・コチェ（Bainung Khoche）とカルトゥン・コチェ（Kharthung Khoche）、レウン・コチェ（Lewung Khoche）の3兄弟がいた。長男であるバイナン・コチェはゾルドゥンに住み、弟2人はテルプに住んでいた。ある日、モン・タワン（Mon Tawang）[2)]から1人のゴムチェン（gomchen、在家僧）がカンパラにやってきて、3兄弟に「私の住む場所ではアマ・ジョモの儀礼をしているのに、なぜここではやっていないのだ」と説き、3兄弟はそのゴムチェンから儀礼のやり方を教わり、ブータン歴1月（Daw Dangpa）のメトイ・ドゥチェン（Metoi Duechen）[3)]と6月（Daw Drupa）のセカイ・ドゥチェン（Soekhai Duechen）、8月（Daw Gepa）のヨスキン・ダワ（Yoskin Dawa）を導入したとされる。その後、ゴムチェンは姿を消したとされ、彼はアマ・ジョモの化身であったのではないかとも言い伝えられている。ヨスキン・ダワ

とは「収穫の月」を意味し、初収穫をアマ・ジョモに捧げるのがアマ・ジョモ・ラセである。メトイ・ドゥチェンとセカイ・ドゥチェンは定まった祭場はないが、開けた土地（pangthang）で行われるアマ・ジョモ・ラセの簡略版である。

3. 神を受け入れる家

アマ・ジョモ・ラセの初日はブータン暦8月14日（西暦2023年は9月28日）であるが、そのための準備は数日前から行われる。儀礼の準備を行なうのは、ツァワ（tshawa）と呼ばれるメンバーで、今年はテルプから5世帯、ゾルドゥンから12世帯が参加している。なおツァワとなる世帯は、上述したコチェの末裔にあたり、それぞれテルプかゾルドゥンに住居を構えている。テルプのツァワは、本来は7世帯であるが、うち2世帯はこの1年の間に、その世帯から死者が出たため、穢れ（drib）の観点から不参加となっている。儀礼に関わる家々では、山の神々に捧げるために、数日前から多くの種類の供物を用意され、ズクパモ（zukpamo）と呼ばれる、神を受け入れるホストの家で儀礼を行なう準備が進められる。ズクパモは毎年ツァワ内で交代され、ゾルドゥンで2年（2世帯）、テルプで1年（1世帯）という周期で回ってくる。ズクパモに選ばれた世帯の構成員は、1年間、穢れの原因とされる肉や卵、にんにく、玉ねぎの摂取が禁止されるほか、死や生の場に立ち会うことを禁じられる。近隣住民もまた、穢れの状態（これらの食物を摂食するなど）でズクパモの家に入ることを禁じられている。万が一穢れた状態でズクパモの家に入ると、個人や世帯、集落に災い（tsup）が起こるとされる。また、ズクパモは毎日サン（sang、焼香）を焚く必要がある。

儀礼初日の前日、ズクパモの家の最奥隅とチェシャム（choesham、祭壇）の上にはそれぞれ、縦横幅10cm、高さ6cmほどの大きさのショマ（shoma、竹籠）の中に、とうもろこしや稲といった穀物類と唐辛子、色とりどりの花々が入ったジョモ・ガ・デル（jomo ga der）やケンチョ・ガ・デル（kencho ga der）と呼ばれる供物が置かれる（写真3）。チェシャムの対面にはジンダ（jinda）と呼ばれるゲストらが座り、上座には儀礼の司祭を務めるフラーミー（phrami）が座る。フラーミーの左隣には、彼の助手を務めるツァンミ（tsangmi）が座り、続いてゴ（gho、男性用民族衣装）とカブネ（kabney、男性用スカーフ）を纏った村の男たちが列に座る（写真4）。フラーミーとツァンミは決まった者が毎年役割を担う。どちらも世襲ではないが、フラーミーが亡くなった際にはツァンミがフラーミーの役割を引き継ぐ形がこれまで取られてきた。現在のフラーミーは8代目であり、初代フラーミー[4]はジョモ（Jomo）と呼ばれる女性であったことから、性別は関係しないと考えられる[5]。第2代目フラーミーはジョモの息子であり、初代フラーミーのツァンミを担っていた。また、歴代フラーミーは全員テルプパかゾルドゥンパである。部屋に座る村人の前には、バナナの葉（kakpa lai shing ga shaba）で覆われた台（choktsi）が置かれ、その上には花が置かれている。フラーミーの前には、バターが縁に盛られたパラン（palang、竹筒）いっぱいのアラ（ara、蒸留酒）にマルチャン

写真３　ジョモ・ガ・デル

写真４　チェシャム内に座る村人

（mar chang）[6]やバンチャン（bang chang）[7]、保温ボトルに入ったンガジャ（ngaja、ミルクティー）が用意されており、その前にあぐらをかいて座る女性が注ぐ。穀物を原材料とする酒類は清浄とされる。

17時ごろにサンが焚かれ、バナナの葉に包まれたバターを手に持った女性によって、チェシャムの手前に座っていたドンレンパ（dongrenpa）あるいはガルパ（garpa）と呼ばれる４人の若い男たち（2人はテルプパ、２人はゾルドゥンパ）の頭にバターが盛られる。その後、真ん中の開けたスペースで、ツァンミが中心となってジョモ・ブロ（Jomo Bro）あるいはジョモ・ガ・ジャプタ（Jomo ga Zhabthra）と呼ばれる足踏みの踊りが披露される。踊りが終わると、村人はズクパモの家から外に出て、外にいる村人にサンをかけ、身を清める。今年のズクパモの家はバイナン集落（Bainung village）にあり、密集した家々に取り囲まれた広場には、柵に囲まれた半径1mほどのサークルがある。その中には、竹（shi）でできたダルシン（darshing、祈祷旗）が5本立てられており、この場所をセル・ガ・ドンレン（ser ga dongren）と呼ぶ。ダルシンの木が織物を織る際に使う棒（dongren）に似ていることからその名がつけられている。5本あるうちの最も長いダルシンはムリン・ピンスムのダルシンであり、他の短い４本は、チョムテル・ドゥチェンとメトイ・ドゥチェンでそれぞれ用いられる３本のダルシンのうち（計6本）、それぞれから２本ずつ持ってきた４本である。残りの１本はそれぞれの儀礼が行われた祭場に置かれている。

ムリン・ピンスムのダルシンは昨年のうちに、今年のズクパモの家に持ってこられた。その理由は以下の通りである。昔、メラにいたムリン・ピンスムがワンセンと呼ばれる場所に居所を築いた。その後、アマ・ジョモが居所を探しにワンセンにやって来たが、すでにムリン・ピンスムがいた。アマ・ジョモは「私がワンセンに居座る吉兆があるのか確かめてみよう」と言い、２人でメラに戻り、大麦の実り具合で吉兆を占った。すると、大麦は見事に実り、アマ・ジョモに吉兆があることがわかり、ムリン・ピンスムはアマ・ジョモにワンセンの居所を譲ったと言われる。この

ようにしてアマ・ジョモの居所は、まず先にムリン・ピンスムが探しに行くという形式になり、それがカンパラのアマ・ジョモ・ラセの実践に反映されているのである。すなわち、今年アマ・ジョモを受け入れるズクパモは、昨年のうちにムリン・ピンスムを受け入れており、来年アマ・ジョモを受け入れる世帯は、今年のアマ・ジョモ・ラセでムリン・ピンスムを受け入れるのである。

ダルシンを運んでくるのはドンレンパである。コチェの統治時代、テルプに住んでいた弟2人のコチェはテルプとゾルドゥンの間に位置するスワ・マニ（Suwa Mani）に来て、バイナンに住んでいた兄のコチェと儀礼に関する話し合いを行なっていた。その際に、テルプから2人、ゾルドゥンから2人のドンレンパをそれぞれのコチェが選ぶことが決まったとされる。当時、アマ・ジョモ・ラセが行われる祭場はバイナンであったが、兄のコチェの子孫は流行病でその数を減らし、また、流行病から逃げるためにシンカル・ラウリに移住したために、テルプの現在の場所に移ったとされる。なお、ドンレンパはフラーミーによって現在は決められる。

4. 神を呼ぶ祭場

アマ・ジョモ・ラセの初日は、午前8時過ぎにズクパモの家の中にて、フラーミーの前に置かれた特別な小台（phrami ga choktsi）の上に、村人がアマ・ジョモへの神饌（chanje）である花（meto）を置きに来ることから始まる。チェシャムの前には、昨日にはなかった、さまざまな形状の竹籠に入ったツォ（tshog、供物）が置かれており、その右横にはバナナの葉に包まれたバターが置かれている。フラーミーは白いゴにスミレ色のカブネを纏い[8]、ツォラム（tsholham、伝統靴）を履いている（写真5）。その後ツァンミが席につき、酒やンガジャが提供される。フラーミーの前にはマルチャンがあり、その横にはジョンチャン（jong chang）と呼ばれる、出発の際に飲む酒が置かれている。午前9時過ぎに、家の中にいる村人の頭にバターが塗られ、外に出ていく。外に出た村人はフラーミーを先頭に、セル・ガ・ドクサ（ser ga doksa）と呼ばれるテルプの祭場に向かって進行する（写真6）。後ろに続く村人は、ツェチャン（tshe chang）と呼ばれるバナナの葉で蓋がされ、バンチャンの入った銀色の壺（tikling）や竹籠に入ったツォを肩に乗せるか背負って、日差しが照る中を歩く。頭に塗られたバターは、セル・ガ・ドクサに入るための印の意味をなしているが、強い日差しのせいで溶けてしまい、汗と混じって額を流れる。一部のツォは車の荷台に積まれ、村人の行進を追いかけるように後ろからゆっくりと来る。セル・ガ・ドクサまでは、スワ・マニを横切り、バンロン

写真5　フラーミーの衣装

写真6　セル・ガ・ドクサへと向かう行進

（Bangrong）にあるチョルテン（chorten）での休憩を挟んで、およそ１時間半かかる。テルプの下部、丘の上に開けた空き地がセル・ガ・ドクサである。セル・ガ・ドクサの下部には車道が3、4年前に開通し、それによりツォを車で運べるようになったが、それまでは全て人が運んでいたという。

セル・ガ・ドクサにはすでにテルプパがツォを持って集まっている。村人は緩やかに曲がった石段の上に銀色の壺を置く。銀色の壺の中にはマルチャンが縁いっぱいまで入れられ、その後ろには米、ケプタン（keptang）[9]、プタ（puta、蕎麦粉を用いた麺）、唐辛子、とうもろこし、きゅうり、なす、ツリートマト、バター、クッキー、バナナ、飴、等が入った竹籠が列にして置かれる。古くから栽培されてきた食物に加えて、野菜や既製品が供えられていることから、村人の生活実態が読み取れる。さらに、竹籠の上には中のツォが見えなくなるほどのク・ケプタン（khu keptang）が積み重ねられる。このク・ケプタンは、ラディかポンメ辺りで亡くなったとされるアマ・ジョモの夫のための（shinang keptang）と呼ばれる。

その後、村人たちは3mくらいの葉付きの木の枝を地面に刺し、パラソル代わりにして日陰を作り、そこに腰を据える。フラーミーとツァンミは石段の前にあぐらをかいて座る。フラーミーの前には石で囲まれた横幅45cm、縦幅が60cm、深さ15cmほどの窪みがあり、その中に花が備えられる。この上にバナナの葉を被せ、そこに初収穫の大麦の実をたっぷりと入れる。大麦がよく育つのはアマ・ジョモのおかげだとされる[10]。石窪みの後ろには網状に編まれた竹の柵と先が箒のように裂けられた1m 30cmほどの竹が地面に刺され、その先の部分にはバナナの葉に包まれたク・ボクピ（khu bokpi、米粉）が入れられる。また、フラーミーの背後には、先だけ葉が残され、真ん中から先にかけて綿が付けられた1m 60cmほどのグレム・シン（grem shing）と呼ばれる木が門の形で立てられる。そこにアマ・ジョモ・ナムザ（namza、衣服）とメメ・ダンリン・ナムザがかけられ、アマ・ジョモの方にはブレスレット（tsho）とネックレス（jiru）、コマ（koma、ブローチ）が、メメ・ダンリンの方にはパタン（patang、短刀）とツェンドゥップ（tsendup）がナムザの上からぶら下げられる（写真7）。これと同じように、フラーミーが座る場所から10mほど後ろに離れた所には、メメ・ポブラ・ナムザが準備される。メメ・ポブラ（あるいはDendup Gyalpo、デンドゥップ・ギャルポ）は、この辺りの土地神（sa ga sungkorpa）であり、その姿はブロクパのようで、ナムザにはシャモ（shamo）と呼ばれる、ブロクパが身に付けるヤクの毛でできた帽子とパタンがかけられる

写真7　アマ・ジョモと
メメ・ダンリンのナムザ

写真8　メメ・ポブラのナムザ

(写真8)。これらの作業は同時並行的に村人によって進められる。その後、ドンレンパの4人によって今朝早いうちに集められた3本の竹に、供物である唐辛子と花、綿が鈴なりになった綱が吊り下げられる。また、竹は綺麗に伸びた良質なものでないといけない。そうでないと、今年の作物の実りが悪くなり、獣害を受けやすくなるとされる。3本ある竹はそれぞれ、レクチャン・セルモ、アマ・ジョモ、ムリン・プンスムのダルシンであり、ジョモ・クンカルの方にお辞儀する様にして立てられる（写真9)。ダルシンが立てられたことで、神々は祭場に招かれたのである。丁度この時、晴天にも関わらず短期間の小雨が降り出し、山の向こうから雷鳴が1回轟いた。村人はこれをアマ・ジョモが喜んでいる兆し（taktsen）と表現した。

全ての準備が終わると、セル・ガ・ドクサの中心にある竈のような石組みの上に金色のザン（zang）が置かれ、そこにバンチャンが注がれたあと、村人によってバターが入れられる。マルチャンである。そして、フラーミーを先頭にマルチャンとツォの周りを時計回りに3回回る。それからツァンミは、ドンレンパがダルシンを持ってきてくれたことに対して感謝を述べる。村人らはジョモ・クンカルとメメ・ポブラの方へ3回ずつ五体投地を捧げる。また、ダルシンの下に集まった若い男たちに向けて、フラーミーやドンレンパがツォやアラを振り撒く。若い男達は目に見えない土地神の代役となって、供物を受け取っているのである。これが終わると、フラーミーは元の席に戻る。住民は手にツォが入った竹籠を持ち、フラーミーの元へやってきて、祝福と長寿の祈りをもらう。村人らが一通り祈りをもらった後、マルチャンの周りに円を描くように座り、ズクパモの交代式が行われる。マルチャンを中心に、フラーミーと交代する新旧のズクパモの女性が対角線上に座る。村人にマルチャンが配られる。フラーミーは左手にバナナの葉に包まれたバターを持ち、昨年のズクパモとコミュニティへの感謝の言葉を述べる。そして、新旧のズクパモの女性と周りの女性たちの頭にバターを塗る。円の中心では、ツァンミが「ヒィヒー、ヒィ

写真9　ジョモ・クンカルの方に傾く3本のダルシンと供物

写真10　アマ・ジョモの馬を持つツァンメパ

ヒー」と馬の鳴き声を真似し、ジョモ・ブロが始まる。ツァンミは、男根の形をしたカラム・シン（kharam shing）を持つ。カラム・シンの先にはバターが塗られ、持ち手部分には竹でできた綱（shi ga takpa）が巻き付けられている。これはアマ・ジョモが乗るチプタ・シンゲ・タシ（Chipta Singye Tashi）、あるいはタプ・タナティンカル（Taphu Tanatingkhar）、単に「アマ・ジョモの馬（Ama Jomo ga Chipta）」[11] と呼ばれる馬の性器であり、馬そのものである（写真10）。この馬と共に、アマ・ジョモはこれから新しいズクパモの家に向かうのである。この時、フラーミーによってルンクン（lungkung）と呼ばれる白い紐でできたスンケ（sungke、お守り）が村人に配られる。これには、長寿を願う意味が込められている。踊りが終わると、ドンレンパによってアマ・ジョモとムリン・ピンスムのダルシンが運ばれる。ムリン・ピンスムのダルシンは、来年アマ・ジョモを迎え入れるテルプの家へ運ばれ、アマ・ジョモのダルシンは今年のズクパモの家まで運ばれる。レクチャン・セルモのダルシンはセル・ガ・ドクサに置かれたままにされる。撤収作業が終わると、フラーミーによって祭場にバンチャンが撒かれる。以降、バンチャンが撒かれたところは聖域となり、入ることを禁止される。フラーミーはアマ・ジョモと共に、ツァンミはムリン・ピンスムと共にそれぞれの家へと向かう。

5. 祭場から神を迎える

バイナンのズクパモの家にフラーミーとアマ・ジョモのダルシンが着いたのは18時過ぎである。村人は、フラーミーによってゴラッブ（gorab）という幕開けの儀礼が行われるまで、ズクパモの家に入ることはできない。それまでは外で腰を下ろし、酒やンガジャを飲む。19時過ぎにアマ・ジョモのダルシンがセル・ガ・ドンレンに立てられる。これによりアマ・ジョモが到来したことになる。ダルシンが囲われた柵の中にフラーミーが入り、まずはバンチャンとアラを地面に注ぐ。これによりセル・ガ・ドンレンは清浄化される。サ

写真11　ゴラッブ

写真12　アシャム・ボックピと
そのほかの食事

ンに新しい灰が足され、煙をくゆらせる。その後、アマ・ジョモの馬に鈴（erka）が付けられ、村人には枝と葉が付いた野菜や穀物、花が手渡される。これらはアマ・ジョモへのニドゥップ（nidup、供物）[12]とされる。そして、村人がズクパモの家のアプローチ階段の下に集まり、ゴラッブが始まる（写真11）。

フラーミーは束になったルンクンを右手に持ち、祭文を唱えながら、ズクパモの女性が両手で持つ小さなバンチャンの中にルンクンの先を浸し、持ち上げては入り口の地面に注ぐ。この時、アマ・ジョモの馬はツァンメパ（tsangmepa）と呼ばれる、ツァンミの代役となる男性が持つ。ツァンメパはアマ・ジョモの馬を上下に揺らし、鈴を鳴らして「アーホイ、アーホイ」と叫ぶ。この掛け声はフラーミーの祭文に対しての応答の意味が込められている。ツァンメパが「アーホイ」と叫ぶと、それに続いて男たちも足踏みをしながら、手に持つ作物や花を上下に揺らして「アーホイ」と叫ぶ。女性たちはアプローチ階段の上、ドアの入り口に立ち、ジョモ・ブロを踊る。フラーミーが全てのバンチャンを注ぎ終えると、フラーミーを先頭にズクパモの家に入っていく。その際、村人が持っていたニドゥップは集められ、ズクパモの女性によって屋根裏（yab）に奉納される。伝統的に屋根裏は穀物を貯蔵する場所であり、豊作を祈る意味が込められている。ニドゥップは屋根裏に1年間置かれる。村人はチェシャムの中までゆっくりと入り、敷板の床が抜けそうなほど足を踏み鳴らして、踊りが続く。踊りが終わり、席について酒が出された後、夕食が出される。夕食はソフトボールほどの大きさに丸められたとうもろこし粉（asham bokpi）とチーズ、大根と唐辛子のチーズ煮込み（mulai solo）、大根の葉（mulai shaba）、コリアンダー（usu）である（写真12）。これらは昔から変わらない食事であるが、現在は米も提供される。食事が終わると、酒と共にジャブタ（zhabthra、歌と踊り）が夜明けまで続くのである。

6. 神の帰還

アマ・ジョモ・ラセの2日目（ブータン暦

8月15日)、午前8時過ぎにチェシャム内に座る村人はうとうとしている。ここに目覚まし酒であるミンチャン（ming chang）が出される。ツァンミは昨日から、テルプのムリン・ピンスムを迎える家に行っているので、ツァンミの席にはツァンメパが座る。タチャ（ta chak、馬の餌）と呼ばれるク・ケプタンがショマに入れられ出される。アマ・ジョモの馬への供物である。その後、ジョモ・ブロが始まる。ツァンメパはアマ・ジョモの馬を跨るように両手で持ち「ヒィヒー、ヒィヒー」とチェシャムと入り口を3回行き来する。アマ・ジョモの馬の胴体に巻きつけられた紐を解き、馬の手綱の様にして、両サイドに男性が立ち、綱を握る。アマ・ジョモの馬は気性が荒い。フラーミーによって村人の頭にバターが塗られ、フラーミーを含む男たちはルムジャン（lumjang）と呼ばれる羊の毛でできた冠をかぶる（写真13)。アマ・ジョモの馬にも小さいルムジャンが被せられ、ジョモ・ブロが再開する。踊りが終わると、ルムジャンは積み置かれ、アマ・ジョモの馬とタチャの入った２つのショマは屋根と梁の隙間に置かれる。そして、ジャブタが始まる。

11時前にテルプパがツァンミと共に、手にニドゥップを持ってこちらに到着する。ニドゥップは屋根裏に奉納される。11時過ぎに昨夜と同じメニューの昼食が提供され、12時過ぎにジョモ・ブロが再開する。フラーミーによってルンクンがまた配られる。村人の何名かは、バナナの葉を敷物にして、束になったルンクンをもらう。首にかけてもらう場合は1本である。そしてまた、ジョモ・ブロが終わると、ジャブタが始まるのである。ズクパモの家の中はこの様にして歓喜に満ち溢れる。

写真13　　ルムジャンをかぶる村人たち

休憩を挟んで12時半過ぎ、ジョモ・ブロが再開し、踊りが終わると、フラーミーを先頭に村人は外に出る。この時、ズクパモの女性によってフラーミーの小台は外に出される。外の広場にはすでに敷物が敷かれ、その上に小台が置かれ、フラーミーはそこに移動する。その後、再来年にアマ・ジョモを迎え入れるズクパモを認定するハ（Ha）と呼ばれる儀礼が始まる。認定にあたっては、アマ・ジョモの馬の胴体に巻かれた合計6本の綱のうち、2本を渡すことになっている。なお、昨日のうちに既に2本が来年のズクパモの家に持って行かれている。フラーミーを先頭に村人は、再来年のズクパモの家に向かって歩き始める。道中、ジョモ・セ・カン（Jomo se khan）[13]と呼ばれる家に止まる。彼らもまた、アマ・ジョモ・ラセのツァワである。村人は道端で集めた花や作物をニドゥップとして手に持ち、ジョモ・セ・カンの家に入ってジョモ・ブロを踊る。ジョモ・セ・カンはかれらを酒やジュースでもてなす。14時半過ぎに、再来年のズクパモの家に着く。家に入る前にゴラッブ

が行われ、再来年のスクパモはアマ・ジョモの馬を迎え入れる。チェシャム内の供物や配置は今年のズクパモの家とほぼ変わらない。これらは同じ様に配置しないといけない。村人はジョモ・ブロを踊る。アマ・ジョモの馬はチェシャムと入り口の間を3回行き来し、その後、ショマに入ったタ・チャが捧げられる。アマ・ジョモの馬を持つツァンメパや踊りに加わっている村人は、「ヒィヒー、ヒィヒー」と叫びながら、お尻をぶつけ合う。これは、背中が痒い時にぶるぶると震える馬の仕草を真似しているという。そして、今朝と同じ献立の昼食が出されるが、ここで出されるアシャム・ボックピはハ・ボックピ（Ha bokpi）と呼ばれる。食後、ジャブタが始まり、一行は別のジョモ・セ・カンの家を経由した後、日没前に今年のズクパモの家に戻ってくる。シェチャン（she chang）が振る舞われ、ゴラッブが行われると、家の中に入る。その後、フラーミーたちはすぐに外に出てきて、フラーミーがダルシンに向かって祭文を唱える。村人は後ろで、フラーミーの祭文に応答するように「アーホイ」と叫ぶ。フラーミーがダルシンの囲まれた柵の中に入り、アラが注がれる。その後、集まった村人は、ジョモ・クンカルの方を向いて五体投地を捧げる。アマ・ジョモはこうして、ズクパモの家での1日の滞在を終えて、ジョモ・クンカルへと帰還するのである。アマ・ジョモは帰還するが、ズクパモの家では1ヶ月のあいだ、焼香（sang）を焚き続けないといけない。この期間に焚く焼香をラッブサン（lhab sang）と呼ぶ。

アマ・ジョモ・ラセの3日目（ブータン暦8月16日）はフラーミーとツァンミ、ツァワへの感謝を互いに示す日である。朝から歌と踊りがズクパモの家で催され、バケツいっぱいに入ったバンチャンが村人らに振る舞われる。差し出した盃には筧が数方面から入れられ、バンチャンが滝のように盃の中に絶え間なく注がれる。これをショルチャン（shor chang）という。村人はそれを飲み続け、また、村人の頭や体にかけられる。午後になると、村人はフラーミーとツァンミをそれぞれの自宅へ、ツォを抱えて送りに行く。それぞれの家では、タン・ボックピ（tang bokpi）と呼ばれるアシャム・ボックピが提供され、これはアマ・ジョモから村人へのニドゥップとされる。こうしてアマ・ジョモ・ラセは終わりを迎え、村人は日常へと戻っていく。

7. アマ・ジョモ・ラセとその行方

本稿では、カンパラで行われているアマ・ジョモ・ラセの諸相を紹介してきた。カンパラには、ラマイ・ゴンパやシカル・ゴンパ（Sikhar Goenpa）、チェン・ラ（Chenla）といった寺院や聖地があり、仏教の影響力が大きく見られる。一方で、村人の言葉を借りればアマ・ジョモ・ラセは「ボン・チェ（bon choe）」である。ボンとは11世紀から14世紀にかけて仏教の影響を強く受けて体系化されたユンドゥン・ボン（g.yung drung bon）と地域的な民間信仰という意味でのボンという2通りに分けることができ、後者をポマレ［Pommaret 2014］はボン・チェ（Bon chos）、フーバー［Huber 2013; 2020a; 2020b］はシーパイラー・ボン（Srid-pa'i lha Bon）と呼び区別している。チェ（chos）とは「宗教（religion）」に相当する単語であることから、ポマレは後

者のボンを宗教と捉えているのに対し、フーバーはシーパイラー・ボンで行われる儀礼を仏教やユンドゥン・ボンとは対照的に、人間のための救済論的・形而上学的教義を欠く、宗教的なものではない俗儀礼（mundane rites）であると主張する［Huber 2020a: 14］。フーバーはまた、シーパイラー・ボンに特徴的な点として、儀礼を執り行なう司祭の存在や天から神々が降りてくる際に用いられる綱、供物や食事が菜食主義であることなどを述べている。アマ・ジョモ・ラセに関していえば、その司祭であるフラーミーは元々「神と人のあいだ（lha dang mi barka）」を意味するラーミー（lha mi）と呼ばれており、次第に発音が崩れてフラーミーになったとされる。また、神々のダルシンには供物が鈴なりになった綱が吊り下げられ、神を呼んでおり、供物や食事も全て菜食主義に沿っている。これらの共通項を考えると、アマ・ジョモ・ラセはシーパイラー・ボンの俗儀礼に考えられなくもないが、アマ・ジョモ・ラセに参加する村人はそれをボン・チェと呼ぶ。ウゲン・ペルゲン［Ugyen Pelgen 2004: 125］は、ブータンでボンという言葉が用いられる際、仏教に分類されない信仰や実践を指すことが多いと述べる。筆者はこの点について、それが宗教的なものであるのか宗教的なものでないのかではなく、人々が「仏教ではないと考えている信仰と実践の総体」がブータンにおけるボンであると考える。そして、実際に村人にとっても大事なのは、それが宗教的か宗教的でないのかではなく、コミュニティにおける共同的な実践が築く、神と人、そして村人のつながりの感覚を形成することにある。しかし、こうした実践がブータンの農村地域で進行する少子高齢化と過疎の影響のなかで継続されるかどうかは未知数である。カンパラでは開発が進み、移住や高齢化でアマ・ジョモ・ラセのツァワ数が減少傾向にあるのも事実である。ツァワの数は元々ゾルドゥンに30世帯、テルプに15世帯あったが、現在はそれぞれ12世帯と7世帯に減少した。昔はカリンやティムシンからもアマ・ジョモの信仰者が参加していたそうであるが、今では見られなくなったともいう。

筆者が今回報告したようなアマ・ジョモの儀礼は、例えば、ソナム・チョペルとカルマ・プンツォ［Sonam Chophel and Karma Phuntsho n.d.］、ウゲン・ペルゲン［Ugyen Pelgen 2007］によるメラとサクテンでのジョモ・ラセ（Jomo Lhasöl）に関する報告や、小林［2013］と鈴木［2021］によるアルナーチャル・プラデーシュ州（Arunachal Pradesh）西カメン県（West Kameng）ナムシュ村（Namshu）のラーソイシェー（Lhasöshe）の祭りに関する報告がある。このように、アマ・ジョモ信仰は広く東ヒマラヤに分布しており、アマ・ジョモを主神とする儀礼もまた、多様性が見受けられるが、他地域におけるアマ・ジョモ信仰に関する詳細は未だ乏しく、アマ・ジョモ信仰の伝播経緯や人々の歴史的関係についてはより詳細な検討と比較を要する。本稿はその一助となれば幸いである。

謝辞

カンパラでの調査遂行にあたっては、タシガン県役所（Trashigang Dzong）の知事（Dzongda）と文化局部長（District Cultural Officer）の協力を頂いた。また、調査にあたっては、JSPS科研費

22KJ1713の助成を受けた。ここに深く感謝を申し上げたい。

注

1) 2023年時点ではチーズ１kgに対して、乾燥したとうもろこしの粒6カウ（約9kg）、バター1kgに対して、同じく乾燥したとうもろこしの粒12カウ（約18kg）が交換の基準値となっている。
2) 現在のインドのアルナーチャル・プラデーシュ州西端に位置するタワン県。タワン県および東ブータン一帯は、かつてモン（mon）と呼ばれていた。
3) ドゥチェンとは「吉兆（auspicious）」を意味する。
4) 初代フラーミーがどのようにしてフラーミーになったのかについては、本調査にて詳細を把握することができなかった。ブータン王立大学シェラブツェ校の調査グループ［Sonam Wangdi et. al. 2020: 36］によれば、初代フラーミーは一連の儀礼のプロセスを自分で学んだと報告している。また、彼女はアマ・ジョモ自身かあるいはアマ・ジョモの顕現であるとも述べている。
5) なお、2代目から8代目までは全員男性である。
6) マルチャンとは酒（chang）にバター（mar）を加えたものであり、ブータンでは主要な行事や来賓の出迎え時などに供えられる。
7) 穀物を醗酵させて作る酒の一種。
8) フラーミーの纏うスミレ色のカブネは、ラマ・モンラム・ロブザンによって与えられた。元々は白いカブネであり、２代前からこのカブネを纏うようになったとされる。
9) ケプタンは通常、蕎麦粉で作られたパンケーキを指すが、後述するク・ケプタンなど、米粉を用いたものなどもある。
10) この考えの背景には、アマ・ジョモとムリン・ピンスムの居所を決める吉祥占いで大麦が用いられ、見事に育ったことがある。
11) チプタとは高貴な方が乗る「馬」の敬称である。
12) チベット仏教においてニドゥップは「成就」を意味するが、本儀礼におけるニドゥップは、その意味では用いられておらず、屋根裏に奉納される作物等のことを指すため、本稿では「供物」と訳した。
13) ジョモ・セ・カンについての詳細は十分に聞き取りを得ることができなかった。その役割や命名については、今後の追加調査における課題としたい。

参考文献

〈日本語〉

小林尚礼. 2013.「『森のチベット』アルナーチャル・プラデーシュ州西部における自然信仰の聖地の今とその特色」『ヒマラヤ学誌』14: 140–155.

鈴木正崇. 2021.「インド北東部ディラン周辺のモンパ族フィールドノート――民間信仰を中心として」『白山人類学』24: 115–136.

〈英語〉

Bodt, T. A. 2012. *The New Lamp Clarifying the History, Peoples, Languages and Traditions of Eastern Bhutan and Eastern Mon*. Wageningen: Monpasang Publications.

Huber, T. 2013. The iconography of gShen Priests in the ethnographic context of the extended

Eastern Himalayas, and reflections on the development of Bon religion. In Franz-Karl Ehrard & Petra Maura eds., *Nepalica-Tibetica. Festgabe for Christoph Cüppers*. Andiast: IITBS, pp. 263–2194.

Huber, T. 2020a. S*ource of Life: Revitalisation Rites and Bon Shamans in Bhutan and the Eastern Himalayas, volume 1*. Vienna: Austrian Academy of Sciences.

Huber, T. 2020b. *Source of Life: Revitalisation Rites and Bon Shamans in Bhutan and the Eastern Himalayas, volume 2*. Vienna: Austrian Academy of Sciences.

Pommaret, F. 2014. Bon in Bhutan. What is in the name? In K. Seiji ed., *Bhutanese Buddhism and Its Culture*. Kathmandu: Vajra Publications, pp. 113–126.

Sonam Wangdi, Peljor Galay, Yezer, Tashi Jamtsho, Dorji Phuntsho, Lobzang Dorji and Sangay Zangmo. 2020. A Study on Lha Gsol of Ama Jomo of Kangpara in Trashigang. *Sherub Doenme* 13: 32–38.

Ugyen Pelgen. 2004. Khar Phud: a non-Buddhist Lha Sol Festival of Eastern Bhutan. In The Centre for Bhutan Studies ed., *Wayo Wayo: Voices from the Past*. Thimphu: The Centre for Bhutan Studies, pp. 125–147.

———. 2007. Rituals and Pilgrimage Devoted to Aum Jo mo Re ma ti by the ’Brog pas of Me rag of Eastern. In J. Ardussi and F. Pommaret eds., *Bhutan. Bhutan: Traditions and Changes*. Leiden/Boston: Brill, pp. 121–133.

〈Webサイト〉

Sonam Chophel and Karma Phuntsho. n.d. Emo Chilé: A Brokpa Song. 〈https://texts.mandala.library.virginia.edu/book_pubreader/49211〉（2023年10月18日閲覧）.

Fieldnotes on Ama Jomo Lhasoel in Eastern Bhutan:
A Case from Kangpara, Trashigang

Yoshiki Ishiuchi (Kyoto University)

This paper presents the various aspects of Ama Jomo Lhasoel, which is held in Zordung and Thelphu in Kangpara Gewog, Trashigang, in the eastern Bhutan. Ama Jomo Lhasoel is a ritual in which various prayers are made for health, prosperity, good harvests, rain, etc., by worshipping and venerating Ama Jomo. Ama Jomo is a goddess revered by the Brokpa people of Merak and Sakteng in the highlands of eastern Bhutan as a saviour and guardian deity who led their ancestors from Tshona in southern Tibet to their present location, where they were under oppressive rule. She is also worshipped by the farming communities of eastern Bhutan and Arunachal Pradesh in India. Ama Jomo Lhasoel in Kangpala is held over three days beginning on the 14th day of the 8th month of the Bhutanese calendar. The ritual is organised by households from Zordung and Thelphu, and the person who acts as the ritual priest is called *phrami*. Ama Jomo Lhasoel is Bon, in the words of the local people. In Bhutan, Bon is seen as a set of practices that originated from traditions before the advent of Buddhism. Many of these have been incorporated into Buddhist values and worldview with the rise of Buddhism today. In this paper, I will ethnographically describe the ritual process of Ama Jomo Lhasoel, focusing on how the existence of deities is experienced and shared within the community. Ama Jomo is widely worshiped throughout the eastern Himalaya, and while there is also a great diversity of rituals in which Ama Jomo is worshiped as the main deity, there is still a lack of detailed information on Ama Jomo-related rituals in the region, and there is a need for more detailed study and comparison of the circumstances surrounding the spread of the worship of Ama Jomo and the historical relationships between people in the face of recent population outflows and a lack of successors to the rituals.